

医人伝

血管造影装置の大きなモニタ画面に、血液の流れが映し出される。八十代の大動脈弁狭窄症の男性だ。それを眺めながら、山本さんは太ももの血管から入れたカテーテルを患部に向けて動かしていく。

三月初めに、名古屋ハートセンター(名古屋市中区)で行われた名古屋地区初のTAVI(経カテーテル大動脈弁留置術)。昨年二月から、兼務する豊橋ハートセンター(愛知県豊橋市)で約五十例の実績を持つ山本さんが執刀医を務めた。

カテーテルには、折り疊んだ生体弁が入っており、大動脈の狭くなった部分に留置して、弁が正常に動くようにする。手術室の大きな窓の外は、見学する医師らで黒山の人だかり。チームは、伊藤立也統括部長らそうそうたるメンバー。「緊張したけど、経験があった分、落ち着いてできました」と振り返る。

豊橋ハートセンター (愛知県豊橋市)

循環器内科医 **山本 真功さん** (37)



ハイブリッド手術室でTAVIの説明をする山本真功さん

三重県熊野市生まれ。日本医大に進み、循環器内科を志した。これから活躍できる場が広がらずで、一人の患者さんの治療全体にかかわれることに魅力を感じたという。恩師の勧めでフランスのパリ大学付属アンリーモンドール病院に留学し、TAVIの技術を学んだ。帰国後、母校に戻ったが、心臓カテーテルの分野で有名な豊橋ハートセンターから誘いがあがり、「高い水準の治療ができそう」と選んだ。

TAVIは二〇一三年十月に保険適用されたが、実施施設は

全国でまだ五十二カ所。外科手術とカテーテル治療の双方に対応したハイブリッド手術室を持ち、循環器内科医と心臓外科医を含めた「ハートチーム」があるのが条件だ。

大動脈弁狭窄症は外科手術により治療できるが、体力の落ちた高齢者には難しい場合もあった。手術が成功しても、入院に胸しないTAVIは、体の負担が格段に少ない。

しかし、血管がもろくなった高齢者は不測の事態が付きまとい、「連携の質が成績を左右する」と強く感じているという。患者さんの状態をもとに方針を立て、カテーテル操作に慣れた内科医、緊急の出血などに即応できる外科医が、お互いの力量を認め合ってこそ、チームワークが高まるからだ。

豊橋と名古屋の仕事を掛け持ちして大変だが、休日は三人の子どもと遊ぶのが一番の楽しみ。(編集委員・安藤明夫)

「TAVI」普及に意欲